

隋書倭國傳「利歌彌多弗利」考

渡 辺 三 男

一、「利歌彌多弗利」は「和歌彌多弗利」の誤りで、「わかみとほり」と読むべきであり

二、宇津保、落窪、源氏等に見えて、古來難解の語とされてゐるかの「わかんどほり」はこれと同一語であり、その語義は「若御とほり」（若き御世嗣の意）であらうといふのが小論の主旨である。

隋書倭國傳の「開皇二十年、倭王姓阿每、字多利思北孤、号阿鞞鷄彌、遣使詣闕（中略）王妻号鷄彌、後宮有女六七百人、名太子爲利歌彌多弗利（下略）」の一節中に、日本語として見えてゐる五個の語の中、「利歌彌多弗利」に如何なる日本語を比定すべきであるか。（異称日本傳六、此語亦寄語之訛、今不可辨）今日この語は一般に「リコミタフリ」と読まれてゐる（岩波講座日本歴史、岩井大慧教授「支那史籍に現はれたる日本」その他）が、この語は果して、「A」固有日本語の音訳であるか。あるひは「B」上代日本人の攝取した漢語であるか。固有日本語には、語頭にラ行音の來ることは絶対になかつたことより、これをあくまで、「B」攝取漢語として考察し、a 漢語そのものとすれば、(1)そも／＼漢語としての語感でないばかりか、(2)意義不明である。b 日本人の音讀せる訛音の音訳と考へ

て、太子を意味する (3)類似音の漢語を摸索してみてもその発見は不能である。次に考へられることは「C」日本人の訓訳せる漢語ではあるまいか。しかしその場合さへも(4)むしろ原漢語が露呈するのが自然であり、例である。(イ、接待者の中夏崇拜趣味、ロ、翰苑に見える「大徳、麻卑兜吉寐」その他の例)又(5)日華交渉の史的裏面より考へ、原漢語が不明になるほど時代は経過してゐない。以上の諸点よりして、漢語とは考へられない。のみならず、(6)アヌ、タリシヒコ、キミ等の日本語と並べて、この語のみ漢語であることも甚だ不自然である。よし漢語を採用したとしても、もつとありふれた漢語であるべき筈である。しからばやはり「A」某固有日本語の音訳であるか。するとこゝに再び語頭ラ行音の問題に逢着する。そこであるひは本文に錯簡誤脱があるのであるまいか。(1)管見に入つた隋書及び同様の記載ある北史、文献通考の諸本を比較するに、何れも「利歌彌多弗利」の一語に関する限り、一致して異同を発見することができない。(2)しかし中国文献に採録されてゐる日本語に誤脱の多いことは、挙例に遑ないほどである。現に冒頭に掲げた文中の「多利思北孤」が「多利思比孤」の誤りであることは、北史、唐書に徴して明らかであ

るといふ風である。故にこの本文の正確度も甚だ不安であり、誤脱なきを保し難い。私は年来中国文献中の日本語文資料を扱つてをり、日本考略以下に採録されてゐる誤脱に満ちた数千の音訳語に、日本語を比定してみた経験から、集録傳寫の間陥り易い誤脱の幾つかの類型を知つてゐるので、種々摸索した末、病根は語頭の「利」にあるのではないかと疑ひ、字体もつとも近似せる「和」を擬して「和歌彌多弗利」と読み、次に之に比定すべき日本語を考へてゐるうち、ふと腦裡に閃いたのが、かの「わかんどほり」の一語であつた。この語は宇津保(梅花竺)落窪(卷の一)源氏(末摘花・少女・滯標・夢浮橋)等に見え、その用例から、王孫を意味する語とは知られながらも、その語源的解明は望みなきものとされて来た難語である。私は倭國傳と源氏のこの王裔を意味する兩難語を結びつけることによつて、一挙に両つながら解明できることに確信を抱いて甚だ愉快であつた。しかるにその後、寛政の考証家藤貞幹の隨筆好古日録を見るに及んで、僅々一百字の短文ながら、翁がかつて一古本の北史に「和」とあるのを見たとして、已にこのことに着眼してゐたことを知り、落膽すると共に、又一面では大いに自分の所見に誤りなきことの確信を得たのである。

「わかんどほり」の語義に関しては、南北朝の河海抄(四辻善成)が弘安の源氏論義の説を承けて「王家無等倫」

なる附会の説を掲げて以来、古今の註釋書の中、深く語源を穿鑿しない花鳥余情(一條兼良)玉の小櫛(本居宣長)を除く他悉くが、少くとも「わかん」「わか」王家の説を支持するものである。岷江入楚(中院通勝)湖月抄(北村秀吟)源註拾遺(契沖)評釋(萩原広道)近くは金子元臣氏の新解、島津博士の講話、吉沢博士の新釋、池田博士の古典全書本、福井博士等の總釋等いづれもそれであり、そのあるものは、本文に王家裔、王家統、王家統流等の漢字を当てゝゐるものさへある。なるほど王家の字音が、「わか」と訛することは十分考へられる。しかし私は、この「わかんどほり」なる語は、断じて「王家云々」といふがごとき字音語ではないと考へる。それは先述の「利歌彌多弗利」を、あくまでも固有日本語の音訳と考へざるを得なかつた理由によつてである。しかしてあくまでも固有日本語として、その語義を考ふべきだと考へるものである。

しからばその語源的解明をいかにすべきであるか。そのことは私の不得意とするところで、専門家の指教を待ちたいが、私はこゝに、『わか(若)ん(御)母音の脱落』とほり(通り)この漢字は必ずしも穩当でないが、「とほり」なる語に血統を意味する用例がある。』なる一私案を提出したい。